



「駅の仕事」 を通して

アナログからデジタルに

◎ 常盤 達雄

国労東日本本部 教宣部長



私が国鉄に就職したのは昭和57年の武蔵五日市駅でした。この当時、駅（に限りますが）の営業（出札・改札）も輸送（ホーム・信号・構内）もほぼほぼ全てが人海戦術によるアナログな仕事をやっていました。

当時は自動券売機すらありませんでした。東京駅から50kmの西秋留駅（現在の秋川駅）までしか自動券売機が無く、その後数年で武蔵五日市駅には最新型が設置されましたが、西秋留駅にあった従来型券売機は、1日一回の集計作業では、後ろ側についていたカウンターの数字を書き止め、120円切符が何枚、140円切符が何枚、200円切符が何枚と計算し、売り上げの合計を算出していました。発売は自動ですが、集計は手動券売機でした。さすがに武蔵五日市駅に入った新型機は自動計算でしたが。

掃除も委託ではなく、駅員さんがやっていて、ゴミは駅の焼却炉で燃やしていました。当時は禁煙などという概念は無く、ラッシュ時のホームでもふつうに吸っていて、ホームの柱は何か所にも吸い殻入れがあって、回収が大変でした。当時の中・長距離列車に禁煙車は無く、昭和56年に在来線特急「とき」の1両を初めて禁煙車にしたときはテレビも大きく取り上げる時代でした。

切符の発券も全て時刻表を基にキロ程を算出し金額を計算していて、売れ筋の所は台帳を作っていましたが、それも全て職員

（社員ではない）が計算・記入していました。当時は電卓すら無く、「出札をやりたければまずソロバンを覚えてこい」という時代でした。

その後転勤した小作駅でも同様でしたが、当然 Suica などあるはずもなく、自動改札機・自動精算機の導入前でした。この時期の小作駅では泊まり勤務者2名でこなしていて、ほぼほぼ一人でこっち向いて切符を売り、あっちを向いて改札の精算をやっていました。この時期の改札の精算の収入は毎日30万円～35万円あり（青梅線で!）、電車が来るたびに10人～20人と並んでいました。現在の小作駅ではその1%程度でしょうか。

現在の駅の事務室はパソコンで埋まっています。どこの駅でも同じような構成ですが、ATOSで電車の在線位置表示のパソコン、ATOSのホームのLED操作のパソコン、遺失物登録・管理のパソコン、ホームドア監視・操作のパソコン2台、エスカレーター・エレベーター監視・操作のパソコン、券売機売上データ管理の集計機、駅全体の売上管理の端末、営業や運転情報が来る端末と、右を見ても左を見てもパソコンです。しかも私が今行っている矢野口駅・南多摩駅では終日駅員一人。これらの機能を1台にまとめたパソコンはできないものかと思う今日この頃です。